松浦　奈津子（山口市）

まつうら　なつこ

一般社団法人おんなたちの古民家
代表理事

プロフィール

山口県立大学（国際文化学部）を卒業後、地域情報紙（サンデー山口）の編集業務に従事。情報紙の取材を通じて、様々な分野の仕事や人に触れ、その中で、古民家の文化的・歴史的な価値、伝統技法に興味を持つ。

サンデー山口の編集長など歴任し、退職後、古民家鑑定士の資格を取得。２０１１年３月、古民家再生事業を立ち上げ、代表理事に就任。同年、山口市の定住サポーターに任命される。

起業・活動のきっかけと仕事の内容

情報誌の記者として、廃れつつある県内の古民家の現状を取材し、修繕・再生・活用を考えてきました。古民家鑑定士の資格をもったことで、山口市の「定住サポーター」第１号に選ばれ、阿東・徳地地域の空き家や古民家に関する情報を集め、行政と連携しながら県内外の定住希望者に情報を提供していくことになりました。いわば「古民家」に関する情報の受け皿で、古民家に住みたい、商売をしたい等々、様々な要望を持った人と人を繋いでいくことになりました。

古民家を再生するには、古民家活用の青写真の他に、設計、リフォーム工事、資金調達、専門職人（大工さんなど）の確保、残っている家財の整理といった多くの作業が必要です。私自身も２０１３年に、山口市阿東の築２００年を越える一軒を再生し、古民家再生のモデルハウスや民宿、移住希望者の拠点といった様々な用途を持つ施設「旧山見邸・田楽庵」をオープンさせました。事業資金は、銀行の融資が主な財源ですが、こうした活動の必要性を必死でプレゼンしたことも、銀行からの融資成功に繋がったと思います。

現在、田楽庵には、古民家を再生したい方たちが、どのように再生・リノベーションしたらよいのか参考に見にこられる事も増えた他、農家民宿として、都会の親子や団体、女性たちのグループが楽しく農業体験をしながら宿泊したり、地元の方たちが会議の場所、法事や法要、レストランとして利用するなど様々な用途で活用されています。

「田楽庵」をリノベーションする際、山口県内の大工さんなど職人さんとの出会いがあり、古民家再生の技術を持った職人さんのネットワークが出来ました。今では、実際に職人さんたちと連携しながら、古民家の修復・再生事業に力を入れています。

また、古民家を海外の方にも知ってもらうため、イベントを企画し、例えば、ニューヨークやスペインから来られた方や大使館の関係者の方に、隠れ家的な古民家でコンサートや食事を楽しんでもらい、庭と居住空間が一体になった、日本独特の建築空間を満喫する試みも進めています。また、古民家を海外に移築し、世界の人たちに日本の古民家の素晴らしさを知ってもらいたいと考えています。現在、理事とメンバー１２名、お手伝いして貰えるサポーターの方が５０人近くいます。

男女の壁を意識したこと、苦労や嬉しかったこと

古民家の再生は、リフォームなど建築分野の仕事が主です。建築業界は、男性の多い分野で、女性の参画はまだまだの状態です。経験の無かった私たちは、高額な請求をされるなど、騙されたこともありました。また、建築の仕事は力仕事が中心です。しかし、設計や室内インテリア、家財などは女性の感性も大事だし、男女の良さ、その人の個性を活かした役割分担が大切と思っています。

古民家を残したい、その技術を評価し、次代に繋げたいという想いや活動が、ネットワークされ、拡がっていくことが嬉しいと感じています。

起業して苦労したのはやはり資金調達です。阿東の古民家を再生した「田楽庵」は、再生資金が約２千万円かかりました。さらに古民家の整理、「お宝探し」と私たちは言っていますが、苦労も多い大変な作業ですが、どんなお宝が出るか、実際素晴らしいお宝が出てきたりして、楽しみな作業です。

今後力をいれていきたいこと

空き家となり、壊れていく古民家も多いので、それを修復・再生し、生活の場として、あるいは、その空間を様々な形で大勢の方々に楽しんで貰うこと、古民家の建築技法などを受け継いでいくことです。

また、２０１４年から、田楽庵のある徳佐地域で、地域活性化になればと、地元農家の方と協力しながら、美味しいお米作りを始めました。おんなたちの古民家の名誉会長でもある、安倍昭恵さんも一緒に手植えをして、その後は有機肥料を使い、特別栽培で育て、「はぜかけ」を行い美味しい「田楽米」ができました。このお米は、東京高島屋で販売が決まり、また、そのお米を使った加工品として、品評会・試食会を重ねながら「モチペッコ」というスイーツも完成しました。これは、山口県が進める６次産業の商品として認定され、地元の方たちも喜んでいます。地方が元気になれば、空き家の多い地域に住む人たちも帰ってきて、古民家の活用・再生にもつながると信じています。未来の子供たちに、一つでも多くの古民家を残していけるよう、今後も幅広い視野を持って、古民家再生をはじめとする活動に力を入れていきたいと思います。

後輩女性へ

常に笑顔で前を向いて生きることが大切。諦めなければきっと「夢は叶う！」

山本　有希（山口市）

やまもと　ゆうき

認定特定非営利活動法人こどもステーション山口
理事長

プロフィール

山梨県出身。浜松市で就職、結婚。平成３年に山口市に転居。「こどもステーション山口」の前身である「山口おやこ劇場」の会員となり、平成１５年から現職。

平成２５年２月に山口県初の認定ＮＰＯ法人として認定され「子どもにもっとゆとりを、あそびを、文化や芸術を！」をキャッチフレーズに活動中。

主な業務の内容

「わたしの子ども」から「わたしたちの子ども」へを活動のコンセプトに、舞台観賞と子どもたちの自主的な活動に対するサポートを大きな柱として活動しています。

人形劇や演劇、古典芸能、コンサート、パフォーマンスなどプロの「なまの舞台」を体感することができます。また「子どもまつり」､「子どもキャンプ」「子どもステージ　る･リ･フリー」といった事業を実施しています。

これらの事業は、同学年の横のつながりだけでなく、異年齢の縦のつながりが共通点です。大人はあくまでもサポート役で､子どもたちの自主性､主体性に重点を置いています。また､「未就学園児の遊びのクラブ」､講演会や学校行事や山口情報芸術センターのキッズスペース、県立美術館の託児施設事業を受託し、保育スタッフ派遣事業にも取り組んでいます。

活動のきっかけ、経緯

長男が５歳の時に、浜松こども劇場の演劇公演のポスターを見つけ、おもしろそうだと思ったことと､よく利用していた私設図書館にリーフレットがあり､「こどもに夢を」という言葉に､とてもわくわくして、子どもと演劇を観に行ったことがきっかけです。

それ以降は、自分が子ども以上に感激して、はまってしまいました。人形劇なのに人形に見えない舞台を、今振り返ってみると、プロの舞台はやはりすばらしいと感じたことがきっかけになりました。子どもと夜に出掛けることはそうそうありませんでしたが、その公演の時だけは子どもと出掛けて劇を見て帰るという幸せな時間を持てました。

男女の壁を意識されたこと、苦労、嬉しかったこと

平成１８年から「クリエイティヴ･スペース赤れんが」の指定管理をしており館長を兼ねています。「館長さんは？」と尋ねられた時、「はい、私です」と答えるとちょっとびっくりしたような顔をされます。女性が様々な所で活躍しているとはいえ、まだ館長は男性というような固定観念が拭い切れていないと実感します。

認定ＮＰＯ法人として認定されるには、様々な書類審査があります。公益的な団体として認められたということで大きな意味があると思います。団体の基盤は会員です。子どもの数が減少しているという現状から考えると、自分たちは頑張っているなと自負しています。

嬉しかったことは、自分の子どもの欠点と思っていたことが、他の人からみると長所であると気づかせてくれたことです。どうしてうちの子はこうなのかしら、と親は狭い視野で子どもをみてしまいがちです。しかし､「良くできたね」と親とはものの見方が違い､声かけをしたり､ほめたりしてくれます。若いママを見ていてそんなに叱らなくてもいいのにと思うときがあります｡「大変だね」などとあえて声をかけるようにしています。このようなことは「こどもステーション山口」では自然にお互いに認めあえていることです。自分の子どもも他の人に見守られて大きくなったと思っていますので、今度は私が見守っているという感じです。

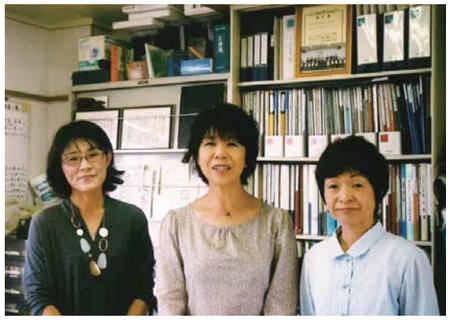
今後力を入れたいこと

一緒に活動する仲間や賛同者を増やしていきたいです。中学生になると塾や部活で忙しくなり、こどもステーションの活動をあきらめる方が多いのですが、会員であり続けて欲しいです。家や、学校、地域でもない居場所として、子どもだけではなく親にとっても、もう一つの居場所になりたいと思っています。

後に続く女性へのメッセージ

私自身の経験から、思春期の子どもと同じ空間で同じものを見て共有した経験が、成人した今その効果は絶大であったと実感しています。限られた時間のなかで子どもとの時間を作る努力が大切ですね。また一人で子育てをしないよう、仲間と一緒に子育てをしていくことが大事だなと思います。

子どもには子どもらしい時間、好きなことに熱中する時間、又は何もしない時間などを持って欲しいです。部活や塾などに振り回されず、子どもが本来あるべき姿はどのようなものなのか、親も子も一度立ち止まって一緒に考えて欲しいと思っています。



川口　みき子（萩市）

かわぐち　みきこ

漁家民宿「遊縁（ゆえん）」
経営者

プロフィール

須佐町の中山間農家で育ち、１９７４年に漁家に嫁ぎました。手芸など手作り品を創ることが好きで、コツコツと創り続け、１９９２年に山口市の「クリエイティブ・スペース赤れんが」で漁師の母ちゃんだからこそ出来た個展にチャレンジしました。

１９９３年から５年間、水産物加工販売所「ジョイフルセンター須佐」で、漁協女性部の活動に参加し、加工技術の取得や販売活動を行いました。

その後、２００５年に自宅で民宿「いかり」を起業し、２年後の２００７年、現在の「漁家民宿　遊縁」の経営を始め、ログハウスやカラオケ施設を増設しました。父ちゃんと息子の獲るイカは鮮度抜群。地場の野菜と組み合わせた「浜ごはん」は好評です。

起業のきっかけ、これまでの取組

最初のきっかけは、海の日を中心に、夢だった作品展「漁師の母ちゃん展 ｜海からの贈り物｜」で想いを形に出来たこと。作品はパッチワーク、人形、アートフラワー、油絵、水彩画、陶芸などなど。漁家は、朝が早く、朝３時に起き、水揚げを手伝う。家事を済ませた後の２時間は、「忙しいから楽しい。」と感じられる創作に勤しめる宝の時間でした。

また、漁協女性部で水産加工・販売施設「ジョイフルセンター須佐」を立ち上げ、ここでの５年間の貴重な経験は、私の意識を１８０度変えました。始末の感覚が身についていたし、仲買さんに買い取られない「雑魚」を活かし、頭も体もフル回転。そりゃあ、本気で取り組んだものです。午前９時までに加工場に魚を運び、午前中に加工。ユニークなネーミングの商品を販売所に並べるのが楽しみじゃった。

この活動は、色々な水産関係全国表彰の対象となり、全国の集まりで多くの人に出会い、こんな楽しいこともあるんだと喜びました。

加工場の仕事を他の人に引き継いでから、調理師免許を取得。自分で食事処をやりたいと思うようになりました。

その頃、益田市の民家利用の食事処で手作り昼食を頂き、これなら自分なりのやり方で、魚料理が出せると思ったんです。近くの農家民宿にも話を聞きに出掛け、模索を続け、５年後家族の理解を得、自宅で「民宿　いかり」を開業。

口コミやマスコミ取材などで、お客さんが増えると、食事場所が手狭となり、駐車場も必要となり、土地探しに１年半、本当に苦労しました。

２００９年１０月、ようやく今の場所に「民宿　遊縁」が開業出来ました。民宿は、２階を活用していましたが、高齢者や障害者の方にも利用できる平屋にし、様々な体験の出来るログハウスも増築。また、近所の人にも使ってもらえるカラオケ施設を併設し、今に繋がっています。

男女の差を意識された事、苦労、嬉しかったこと

網元じゃったから、特殊な面もあると思いますが、嫁に来てからずーと家長のじいちゃんから１０日分ずつ生活費を貰い、やりくりする生活じゃった。「嫁は手間にもろうた。男の子を産まん様じゃあ、こらえん。」とも言われ、地域の寄り合いに出ても、女性の意見は「おなごされがー。」と頭から否定され、発展性がなかった。家の中はもっと酷い。会話が無く、笑顔の無い暗い日々。はぶてる日も多かった。ばあちゃんの立場はもっと可哀想だと思っていました。今、じいちゃんが入院して、私がやっと家計を貰うことが出来たんです。

北浦の封建的な風土もあり、自分が起業するのに、家族の理解を得るのが一苦労でした。特にじいちゃんからは「漁で稼いでいるのに何が不足か。」と言われ続けました。私が粘りに粘るので、「どねえしても、民宿とやらが、したいんかの。」と３日後にやっと許可が出た時は、嬉しくて涙が出ました。夢を持って、始末して、貯めたお金で、トイレや風呂場、台所を綺麗にしました。今までじいちゃんの言いなりで、我慢してきたばあちゃんが、「みきちゃんありがとう。」と、そりゃあ喜んで貰えたのが、何より嬉しかったです。

そして、今の土地が購入できたこと。先祖代々の土地は中々分けてもらえない土地柄で、しかも自分がコツコツ貯めたお金で土地代が払えたから、一層嬉しかったです。

今後力を入れていきたいこと

漁師の母ちゃんの生き方を貫き、今の気持ちや姿勢を維持していきたい。いろんな人に出会い、やりたいと思ったことを貫く。「やってみんとわからん」。今、頑張った料理を通じて、出会えた人と心が通い、元気と生きる張りを貰って、なんと嬉しい毎日になったことか。「人生は、積み重ねじゃけえ」。民宿の仕事を通じて、地域の人の協力を頂き、須佐をこれからも元気にしたい。「聞いてよ聞きますお母さん」をモットーに、出会いと会話、ふれあいを大事にしていきたいと思います。

後輩たちへ

４０年経ち、やっと川口家の嫁になった気がします。あんなに嫌われて、寂しい思いをしたけど、今は「みきちゃんじゃけえ出来るのいねえ。」に変わってきました。若い時は個性が強く、変わり者じゃった様に思います。コツコツとやっていくしかない。女が認めて貰うには、出来ることをやり、成果を残すしかない。現実を受け止め、楽を選ばず、やって来る道を進む心意気が大事と思います。

大漁旗の手ぬぐいを被り中学生に講話

店の前にて

倉光　雅子（柳井市）

くらみつ　まさこ

sweets & cafe **miyabi**
経営者
（手づくりお菓子の販売とランチ、カフェのできるお店）

プロフィール

１９７６年３月学校を卒業後、地元の病院で栄養士として活躍。２人目の子の出産を機に退職。

１９８８年　保健センター、保健所などで、地域活動栄養士として、料理教室や栄養相談等に携わる。

１９９５年７月　ホームコンサルタントとして中国電力で料理等を教え、自らも出張の料理教室、栄養指導を同時に行う。

２００２年３月　中国電力を退職。栄養士の経験を生かして地元柳井にこだわったみやげ菓子を作りたいと、お店づくりの準備に入る。

２００２年８月　小さな手作りお菓子工房「みやび」をオープン。翌年からＫＲＹ熱血テレビの料理講師を７年間務める。

２０１０年に地元柳井をＰＲできるお菓子や健康を考えたランチを提供できる店、「sweets & cafe **miyabi**」をリニューアルオープンし、現在に至る。

現在、スタッフは、常勤９人、非常勤１人の１０人です。幼児や子供を連れて気軽に食事ができるよう、また、赤ちゃんが泣いても気兼ねなく友達と食事やカフェを楽しめるようキッズルームを設けています。また、少人数の会議や打ち合わせ、話し合いができる場として個室も設けています。

起業・活動のきっかけ、経緯

観光の町柳井に微力ながら貢献したいと考えていました。地元に密着したお菓子が少なかったため、昔からの特産品である柳井縞をモチーフにお菓子作ろう。そうすれば観光ＰＲに役立てるかもしれない。試行錯誤の末、考えたお菓子が「縞織り」です。ブルーベリーで味付けと色合いをつけたほんのり甘いバームクーヘン風の焼き菓子です。

試行錯誤の末考えたお菓子と手作りの可愛いお菓子で、お菓子屋が開きたいと考え、女性起業家スクールに入門し、起業家のノウハウを学びました。また、西京銀行、市民バンク融資第一号となり、手作りにこだわった小さな手作り菓子工房「みやび」をオープンしました。１０畳位のちっさな店でした。

食べて帰りたいという人達がいて、お菓子だけでなく、安全な食材を使って、食べて健康になれるランチとカフェのできるお店を出したいと思うようになりました。

神戸で管理栄養士をしていた娘が帰ってきてくれて、メニューの内容や開発、店の内装など若者の発想で考えてくれました。開店できたのも、夫や娘のおかげです。

男女の差を意識されたこと、苦労、嬉しかったこと

普段はあまり感じたことはありませんが、自営業と家庭の両立は大変です。家族の支えがあってこそ好きな仕事が続けられていると思います。何度も足を運んで下さるお客様がたくさんおられること、美味しいといわれることが励みになっています。

今後力を入れていきたいこと

栄養士ならではのお菓子、例えば、ヘルシーなお菓子、野菜にこだわったお菓子、大好きな柳井を発信できるオリジナルのお菓子、手作りのお店だからこそできる丁寧で個性あふれる可愛いお菓子を製造していきたいと思います。

安全な食材を使用し、出来る限り地元産・山口県産にこだわって、健康を考えたメニューの開発をしたい。食べて健康になれる優しいランチとカフェを目指したい。

チラシや作品を置きたいが、主婦は置いてもらえる所がないという人達がいます。そういう女性達がチラシを気兼ねなく置くことができ、自分の作った作品を持ち寄り、交流できる共有スペース、地域のコミュニティステーションとなって、「sweets & cafe **miyabi**」が、柳井の良さを発信できたらと思っています。

後に続く女性へのメッセージ

好きな事、やりたい事がみつかったら、その道は困難であっても、決してあきらめないでください。想い続けていれば、必ず道は開けます。思いはいくつになっても可能です。そして、自分のためだけでなく、誰かのためにという意識を持てば、がんばれます。

個性溢れる、可愛い手作りお菓子を製造中